

(二) 時を翔けるロイエンタール

ロイエンタールは焦っていた。

帝国暦四八六年の四月、初めてラインハルトのもとを訪れて、その幕下への参画を誓って後は実に多忙だった。

ミッターマイヤー

ダイメシヨウゲン

親友を獄中から救い出すと、蛇夫人バーネミュンデ侯爵夫人への謀略工作に着手。侯爵夫人を自裁に追い込むことでラインハルトを長年の後顧の憂いから解放することに成功した。

宮廷での戦いが終われば、待っているのは宇宙での戦いである。バーネミュンデ侯爵夫人の自裁を見届けると、ラインハルトは皇帝よりイゼルローン回廊への征旅を命じられる。ロイエンタールにとって、この黄金の髪の覇者のもとで戦う初めての戦いでもあった。

「——にしても二ヶ月とはな……」

「一体、これだけの艦隊を出して、何をするつもりなのやら……」

ミッターマイヤーの口調、応じるロイエンタールの表情がともに苦みを帯びるのはやむを得ないことで、五月末に作戦が発令されたかと思うと、その一ヶ月半後の七月半ばには早くもミュッケンベルガー元帥麾下に数万の艦隊が首都星^{オーディン}を進発する予定である。ラインハルト自身も初めて制式一個艦隊を率いることになり、その準備作業が多忙を極めるのは当然のこと

だった。

だが、それだけの物資と兵力を動かし、莫大な金を中空に撒き散らして、一体、この国は何を得るというのだろうか。正確には、この国を動かしている……と信じている連中は、国を動かしていく上での、どのような問題を解きほぐして行こうとしているのだろうか。

——いや、それはいい。

本当はよくない。ミッターマイヤーがロイエンタールの内心のつぶやきを耳にしていれば、後ろから張り扇^{せん}の一発もお見舞いしてくれるべきところである。

——なぜ、ミューゼル閣下はキルヒアイスをあれほどまでに信用し、重用なさるのか。

ロイエンタールの脳裏を占めていた想いは実にそれだった。

——だいたい、バーネミュンデ侯爵夫人を陥れた策を出したのも、閣下の姉上が狙われた際に実際に暗殺を防いだのも、この自分、オスカー・フォン・ロイエンタールではないか。

これほど役に立つ自分をさておいて、ただ幼なじみであるという理由だけでジークフリード・キルヒアイスを最も深く任用する。それは理不尽というものである。

キルヒアイスが役に立たないというのではない。能力・識見・人柄のいずれにおいても、あの年齢であればどこまでに傑出した人物を、ロイエンタールですら他には知らないほどだ。

——だが、しかし!!

では、我^{われ}ロイエンタールがキルヒアイスに劣っているというわけではない。決してない。断じてない！ 自分がキルヒアイスと同じ立場に立てば、キルヒアイス同様、いやキルヒアイスよりもさらに有能であり得たはずなのだ。ラインハルト・フォン・ミューゼル閣下の信用、信頼、そしてその笑顔。今、キルヒアイスに真つ先に向けられているすべての恩寵……ン？……が、我^{われ}ロイエンタールに向けられたとして、何の不思議もない。

ゆえにこそ、ロイエンタールはラインハルトにとって有用で、有能で、より信頼すべき存在であるために、その全能を尽くす……のだが、やはり、赤毛の若者という決定的な壁を崩すことはどうしてもできないのだ。

ロイエンタールは天を仰いで、運命の残酷さを嘆く。

——青と黒（の金銀妖瞳）は赤（い髪）には勝てぬ……そんな理不尽があつてはならぬ。天は許しても、人が許さぬ。このロイエンタールが許さぬ。一度は勝利の栄光を得たではないか、あの劇的な最後の戦いで！（って何の話をしているんですか、ロイエンタール閣下？）

そうとも正義は勝つ。必ず勝つ。彼は予言されたのだ。邪^{よこしま}な意思、それを阻む厚い壁の向こうに栄光があると。

だが、実際にどうやってあの赤毛の若者がラインハルトの周

囲に巡らした壁を崩すのか、今のところノー・アイデアなロイエンタールでもあつた、何しろ、ロイエンタールとキルヒアイスの間には決定的な時の流れの差があつたから。すでに九年前、隣家に引越してきたラインハルトにキルヒアイスはまっさきに手をさしのべ、その時に、あの二人の運命的な絆はできあがつていたというのだから。

九年前、自分は何をしていたか……絶望的な思いとともにロイエンタールは思い返す。九年前。ロイエンタールは一九歳の個人としてはまだ一介の士官学校生徒に過ぎなかったが、父の残した莫大な遺産とともにロイエンタール家を嗣いでいた。一〇歳の子供でしかないジークフリード・キルヒアイスよりも、遙かにラインハルトにとって資すべき僚友となれたはずではないか。なんと、運命は皮肉で無情で、底意地の悪いものではないか。

——時の差、そう、時の差をさえ埋められれば、俺のあるべき席はここではなく、ミューゼル閣下の隣であつたはずなのだ……！！

表面、まことに冷酷無類、威風堂々、容姿端麗なロイエンタール閣下であつたが、その実、内面の叫びはかくも焦りに充ち満ちたものだったのである。